

△翻
訳▽

ヨゼフ・エッサー『原則と規範』(十)

本稿は、Josef Esser, Grundsatz und Norm in der richterlichen Fortbildung des Privatrechts, Rechtsvergleichende Beiträge zur Rechtsquellen- und Interpretationslehre, 4. unveränderte Auflage (1990) の著者と出版社の承諾にもとづく翻訳である。(但し、第一編四章および 3. unveränderte Auflage, 1974 による。)

米 山 隆(訳)

目 次

第一編 私法における普遍的な法原則の現象形態と法思想の現象形態

第一章 題目の限界と意味

第二章 法律学的な原理の力としての裁判官による法の形成(以上第一巻四号)

第三章 我々の問いかけの提起にとつての比較法の意味のために

第四章 普遍的法原理の概念と本性に関する暫定的仮定(以上第二巻四号及び第三巻一号)

第五章 実定的憲法原理の裁判官による法形成のための意味(第三巻二号)

第二編 法における原理の分類と類型決定の試み

第六章 狭義における法原理の類型(第三巻三号)

第七章 法発見の原理

第八章 法原理・法規範及び法源の關係に関する普遍的なこと(以上第三巻四号及び第四巻一号)

第三編 法典化された私法の定立における法原理の役割と裁判官のつくった法における法原理の役割

第九章 法典化された民事法における原理と法規範(第四巻二・三号及び本号)

S.176 我々は、他の個所で法律実証主義のこの状態の特性を親しく知り合つたのであり、また、絶対主義的な思想界からの歴史的な解説方法の沿革を注目してきたのであり、この解説方法は条文への忠実さのなかで王侯への忠実の継続を体験するのである。しかし、

ここで、今なお、法律実証主義の思想界への忠実のさらなる要求が設定されるのであり、また、このことは若干注目しに値いするところである。すなわち、「歴史的解説」という術語は二重の意味に使用されるのであり、一方では資料の技術的な使用は条文の理解の補助手段としての意味をもつが、次にはしかし、また、この条文が代表している原理の歴史的な観念論へ裁判官を固定する意味を与えられる。しかし、それとともに、解釈の対象は疑問にされるのであり、また、「条文」は文学的作品あるいは目的論的書類としてその歴史的・個人的権威価値にもとづいてみられるのであって、その現実の秩序価値にもとづいてみられるのではない。

S.177 また、その際奇妙な実証主義的な条文忠実の倒置過程が発生するのであり、歴史的な資料利用の技術に理性的であるものは、条文絶対化のための「あきらかな意味」の解釈学説によって犠牲にされるのであり、その結果、それともに行う必然的な目的論的解説を公然とうちあけることも、また、有効な裁判官権力を法源論において承認することも敢えてしないのである。

S.178 不正義の決定のために、立法者に責任を負わしめ、彼のつくる条文を人々はまさに無視しない便利な選択をするのか、あるいは、その結果から「このことは立法者の意思でありえた」ことではなく、したがって、人々は条文を「立法者の意義において」原則的に自己の責任なくして訂正するということを証明する便利な選択をするか、いずれかである。すなわち、法典の向うに——しかし法典を通して。

S.179 パンダクテン学者の教育は民法法解説に、ローマ法学者の「その当時の解説」と裁判所の使用において特定化された「現在の解説」との間を注意深く区別することを教えたけれども、制定法の「精神」についてののは明い表象は、広く、ドイツの民法法解説を支配している。法の意味に対する象徴的形相としての「立法者」は方法と理由づけにおいて制定法からのかくされた離反を許容するであろうがゆえに、彼は管理されない形相になるのではないとしても、この立法者は不幸であるのではなくして、VAHNERの実用主義にとって美しい事例であるのであらう。この点にドイツ民法法学においてもまた「あきらかな意味」の解釈学説を保持するための主たる原因が存在する。この解釈学説は二つの規則を發展させた。すなわち、一つは、「示唆理論」としてあらわされてきた「黄金体」の修正であり、それによれば、条文のなかに表現されているものは「立法者の意思」として解釈されることができにすぎないのであり——補充的な解説の援助が許容されるならば、すなわち、とくに、選択的に行われる資料の利用による目的論的解釈を通して、その際「不完全な表現」に満足することをもって、指標をさえ設定する自由が留保されることはもちろ

S.180

んである。他面において、「一義的な文言が拘束し、また、欠缺の承認を排除する規則である。この規則とともに条文のなかへ法律学的法創造を大きく侵入させる個所は閉ざされるのであり、この個所は承認された「解説手段」の不十分な成果に際して法発見は「法の欠缺」の承認をもって「法を越えるもの」を理由づけるのである。⁽¹⁶⁷⁾ あきらかにここでもまた「規則」は変更管理の単純な道具にとどまるのであり、この管理は、必要に応じて、「特別な事情が存在するならば、例えば、所謂「直観の欠缺」を、また「一義的な条文」のもとでは「欠缺充足」を許容するのである。⁽¹⁶⁸⁾ それでもって人々は結局無意義な格言、すなわち、「言語において疑問がないならば、恣意的な問題を許容する必要はない」ということを見捨てた。自由な、そして目的々な原則形成はもはや法典編纂侯の古典的な禁止を通じて妨げられないのである。「制定法には、単語の本来の意味からその関連において「あるいは立法者のあきらかな意図から輝き出る以外の他の悟性がつけ加えられてはならない」。⁽¹⁶⁹⁾ 制定法の歴史的な精神からの「イデオロギー的な」解説への強制は下落したのであったし、普遍的ではなくして、特殊なできうるだけ多くの事案の法律要件から出発する法発見の方法である、カズイスティックな発展形成を体系へと方向を変えさせ、問題を解決した——全くこのことを誰も知らない。それは「開かれた」体系である。基礎と限界をあきらかにすることによって、方法的なものによって操縦されるのではなくして、上訴審に実際に司法的な法形成力を拡張あるいは縮小するための白地委任を与えるところの空虚なきまり文句を通して操縦される。⁽¹⁷⁰⁾

このようにして、その場合、欠缺が承認される用意があるところでは非常に広汎な最高裁判所の補充ということになるのである。このような事案において法典編纂の「体系化」もまた時代にふさわしくないものとして克服される。「法典の精神」を決定するその当時の時代の社会的な「原理」こそ新しい社会像から決定された矛盾を見つける。法の発展形成は開かれた裁判官の創造である。法典の体系は意識して破壊される。

事例として一九三三年二月六日の大審院(第三民事部)の有名な判決が役立つかも知れないのであり、この判決は一部ストライクを通しての損害を客観的不能と受領遅滞のBGBの範疇のものにもはや把えるのではなくして、新しい、民事法には馴染まない「経営危険」の姿をもって取り扱っている。⁽¹⁷¹⁾ 大審院はここでドイツ民法典の理念につき全体としての今日的秩序体系を設定している。すなわち、「しかし、争訟の満足しゆく解決に到達するために、一般に民法典の規定から出発してはならないのであって、むしろ社会的諸関係を注目しなければならぬのであって、社会的諸関係はそれ以来発展してきたものであり、また、最近の時代の立法においてもまたあきらかに承認をみつけたのであった」。裁判官は義務づけられているがこれは法典の精神と

あきらかに異なっていると見られる。「民法典は、だからこそ、その成立期の諸關係に一致して、個人主義的な立場に立っている。その間にあって、しかし、社会的な労働協同体と経営協同体の思想が普及と承認を見つけたのであったし、この思想は使用者と労働者との間の關係を、すくなくともここに存在する種類のより大きな経営のもとで、支配している」。新しい問題性は新種の解決を要求する。「個々の労働者の使用者との關係が問題であるのみならず、社会の二つの集団、使用者層と労働者層との間の規律が問題である」。この解決は事案と具体的正義によって支えられる。理由づけは、まずはじめに純粹に普遍的包括的法律要件によるのではなく、特殊な、できうるだけ多くの個々の事案によって規律される法律要件から出発する非教義学的なものである。「もしも人々がこれと別異に決定しようと欲するならば、不可能な状態が発生するであろう」。制定法に忠実な解決は全法秩序の新しい秩序原理に対する衝突として放棄される。「このことは経営の基礎としての労働協同体とむすびつかない」。今や はじめて古い体系の概念の枠への教義学的組み入れの可能性が調べられ、また、実証されるので、BGBの存立している、新しい状況をあきらかに「把握しているとはいえない」制度と形式的に争うことなく、ここで、単に「欠缺のみが充足される」。「しかしまた、この社会的諸關係から取得された成果は困難もなく民法典の諸規定につけ加えられる」。しかし「欠缺充足」のさ らにつづく論拠の全々の最後に、改革の眞の衝動がもういちど告白される。事実上の發展は法を超える新しい制度に強制する。その際司法的發展は全く独立的徴表として評価され、また、それにふさわしい先例の存立あるいは不存立は歓迎されるか、または、批判される。「またここで取得された成果は營業に関する裁判所の各審級の数多い判決決定と一致しているのであり、この審級を原告が訴訟にもたらししたのであり、また、例えば、既に言及した一九一九年一〇月六日のベルリンラント裁判所の判決におけるように、個々の異なる見解が代表されるならば、それは本質的に民法典の規定に余りに多くの意味が帰せられ、またその間に發展した社会的諸關係に余りに少い意味が帰せられるということにもとづくのである」。

實際のために原理への依存からますます解放されるものとしての選択は残っていないし、この原理は「立法の精神」としての「法の精神」をたいして代表するのではなく、——この依存は、その無意義性を既に *Gez.* は実証したのであったし、また、あの制定法に対する信仰とともに、いつかは消滅しなければならないであろうが、すべてのことはその「根本思想」のなかで力において解決は先取りされている。じじつ、その場合もまたこのような擬制の受入れ態勢を克服することが全面的に承認され、また、歓迎される。しかし、たとえ制定法化された働いている法の歴史的な「精神」の原理が衣を脱がされるとしても、理論が、いかな

S. 182

るものが、今や、この「働いている法」の今日的な原理の基礎と正当化であるかという積極的問いかけの前におかれるならば、理論は苦しい決断のなかに包まれるのであり、その理由は、この「客観的評価基礎は実証主義を「克服してゆく」自然法思想のなかに前もってみつけれられるという実際家の希望は、あえてこの評価基礎を破壊することをしていない。すなわち、法典化された体系のみならず、規範に濃縮されなかった倫理の標準を含む全法秩序の事物論理と言語論理の解説事象自体を統合動作として、いいかえれば、ここで実証化動作として把握して理解しないならば、いかにして「実定的な」法原理が「前実定的な」法原理から統合されるかは秘密のままである。いかなる役割を、体系の既に前もって与えられた原理として共に考えられる「原理」が現実(182)に演じているか。また、いかなる意味をこの結晶化の過程の際教義学的概念と「構成」は所持するかは、法律学的解説事象自体のより正確な観察からのみ経験的に知られることができる。この教義学的概念と構成は実際に法に先行する法律学的教智であり、各々の「成文法から論拠と理性をひきだす法の解説は、他の知識と同様に、みずからの原理にもとづき法の有用性から疑われる多くの結論と決定を聞知してゆく学問の衣を生むのである」(183)

(15) Vgl. oben Kap. VII, S. 121 ff.

(153) Ebd., S. 130 N. 146 ff. Ebenso de Boor (N. III 171) 35; Somlo (N. III 26) 385 Anm. 1 の参照をまた見よ。本質的なことは私は主権者からのテキストへの権威の移譲のなかにあるように思われるのであり、この移譲を Plucknett (N. II 102) 440 は理念史的にあまりに「創造する人は解釈する」という命題はすべての絶対主義について固有のものである。(bei MEIER-HAYOZ (N. I 69) 27 の Nachweise, von der Constitutio Tanta, C. I, 17, 2, 21 最後は bis zur Ord. Louis XIV, v. 1667, 1, 7, zum Josephinischen GB, von 1786, 1, §26 und dem pr. ALR, Einl., §47 の Nachweise を参照せよ) この命題は「第三権力」の解消とともに君主国からテキストの自律になり、このテキストは「裁判官自身が誤った計算を留保したことにより(錯誤法)、彼には不可侵なものとなった。」「そうであった」と Plucknett は註記している。「一四世紀末も、そして、おおよそ今日もまた今なおそうである」と(443)。インクランドでは慣習を断つことも存在していないし、また、最も古い制定法の慣習を断つことも存在していないということがつけ加わるので (Vgl. WORTHLEY [N. II 102] 20 ff.)、その結果例えば一九三一年の古い日曜労働の禁止を考えて固有の映画法が日曜上演を許可しなければならなかったものであり、あるいは陪審裁判所は窃盗の剣をかくさなければならない。その理由は、もしそうでなければ盗人は一八〇八年の法律にしたがって住み馴れた家からの四〇シリングよりもより多い価値のあるものの窃盗のために死刑に処せられるであろうからである。WORTHLEY は、「法規の解釈はつねに、全く変化させられた社会の状況を顧慮することなく、行われた」と註記している。したがって彼の奇妙な比較「大河としての法、妨害してゆくダムとしての法令」が理解される。

(14) So RADIN a. a. O. 869. Grundsätzlich jetzt BETTI: Rabel-Festschrift II, 79 (142).

(15) Vgl. POLLOCK, A Plea for Historical Interpretation: 39 L. Q. Rev. 163 ff. 大陸の上の極端にされた資料の論争の事実上の意味のため、BGE 34 II 826 のような引用を伴う GERMANN, Methodische Grundfragen (1946) 16 ff. 及び Du PASQUIER (N. I 19) 11/12 更し SOHNEN v. STAUFENBERG III (1935) 32 ff. により出版された Handbuch der Entscheidungen des Stdt. Int. Gerichtshofs のなかで組成された aus der Praxis der Cour, Permanente からの引用を参照せよ。それに反し、上述の N. II 137 に複写された Recueil des Arrêts 1950, 18, ALVAREZ im Avis Consultatif v. 3. 3. 1950 の意見、及び Ann. Inst. Phil. 43 I (1950) 444. における LAUTERPACH の提案のための、同じく上述の N. II 130 と言及された LORD BECKETT の立場設定を参照せよ。ところが、深くはいつつなう、また、イギリスの制定法の特性を、私の考えるよりでは「正當に評価しつつなう比較法的叙述」 von CAPITANT, Les travaux préparatoires et l'interprétation des lois: Recueil Geny II, 204 ff.

(16) Sog. Sens clair-Doktrin. BLACK (N. II 146) 11. 「解説の口実のもとで、立法府が施行せんと欲したものと異なる法をつくることは許されるものである。」よりから次のように生ずる (S. 45) 「解説は、その意味が明らかであるならば、たとえ文字上の解説が施行の目的そのものを打ち破るであらうとしても、文字通りであらねばならない。また、他面において、「意味が曖昧であるならば、意味をさがすことは(あるはずであるが)、裁判官自身の考えを代行する自由はないはずである。——このことはテキストの絶対化のその一面である。すなわち、それは法律学の客観的規範獲得のための能力への不信である。他面は歴史的関連からの解消であり、この関連は批判的解説にまっすぐに強制するであらう。禁止の理由のための、「法の精神を参透させるための」また、口頭の解説の技術で満足するための GENY, Methode I, S. 31 を参照せよ。イギリスの制定法の解説の特に硬化した態度のために「黄金律」、「立法部の意図が表現されるや否や、表現は意味のあるものとなるが、意図は意味のあるものとならない」フンクローソン立法部の政治的發展が責を負い、その発展につき USA においてもまた、立法部は「制定法を通過させるために「公正に正確な操作」のみを果たさなければならないという原則が通用するのであり、そのために立法部は「一時的に権限を割りあて」られているが、「彼等の意思を制限内においてさえ同胞市民に課し」てはならないのである (RADIN a. a. O.)。立法部の主権からの解放とコモローの優位(コモローは議会の行為を管理する)はここで法的にいわば格下げされた法律概念となつて、じつしに働く。そして裁判官の側からみれば PLUCKNETT (N. II 153) によつて記述された「第三権力」の国王からの解消 (Thronkrise Edwards III. 30. 11. 1340) は裁判官職の威信獲得としてはたらくことはもちろんであるが、権力の喪失としてもまたはたらくのである。社会学的法律は政治的なむすびつきとテキストに対する立場を結合するので、政治的なむすびつきからの解放はテキストの權威を再び高く評価することを結果として持つのである。ツンフトのように組織化された裁判官は職人的なことに満足を見るのであり、コモローにおいてもまた Year Books と Reports における先例の集積をもつてテキストの資料を創つていて、この材料によつて職人的法律稼業が維持されることができ。 (17) 同様であるのは既に REICHEL (N. I. 8) 64-92. 彼は(獲得されたものの観点のもとで)資料の使用において恣意を非難するのみならず。立法者が「理性から」許容したものの「非存在論的」表象のもとにおける目的論的解説の異別化作用を非難するのである。

- (15) Die BGH bei Du Pasquier, S. 12 u. 13. は同様であり、それによれば、非難は判定されるべき法律につき正当に呼ばれている——「しかし、これは法を認めないための理由ではないということ」である。人々が述べる地下水事件においてもその見方は「もはや今日の法意識に一致しないが——なかなか人々が地下水の性質について精通して以来——しかし少からず立法者によって欲せられていた」。
- (16) So weitere BGH-Beispiele bei Du Pasquier a. a. O.: 法の用語は非常に狭い。——「この結果は立法者の意図に答える術を知らないであらう」——「この結果は法のすべての感情に反するであらう。また、それゆゑ法の意思に一致するといひ得るであらう」など。立法者についても証明規則は通用する。すなわち「各々の任意のものは善も推定されるが、そのかぎりにおいて反対も証明される」。Du Pasquier は述べる。すなわち「連邦裁判所に、論理の糸の裂け目が恐れられる法文をこの点から曲げることが行われた」。
- (16a) 法律の「精神」のために、vgl. RGZ 70, 429; 107, 74. それに反つて「目的」のために RGZ 113, 328; 117, 429. 「法律自体はそれを創造した人々よりも賢明でありうる」(ENDEMANN [N. I 28] 152) という表象は、我々よのものとせば「フランスにおける」と異なつて、裁判官は立法者よりも賢明であることがきつて真理を縁どらなければならぬ。
- (16b) 所謂「二重の解説」の教説。そのなかで「法の偶然」と「法の本質」との間でついに適切に区別された。
- (17) REICHEL (N. I 8) はそれを神話や古い宗教の姿と比較しないのは違法ではなく、これらの姿は賢者、創設者、予言者としてのその權威をもつて普遍妥当な人倫の真理をばこめて「積極的に」しなければならぬ。
- (18) BGH 原則の分析とそれ REICKEL (N. II 139) 1033. Vgl. aber auch schon Heck in ACP 112, 143. Weiteres unten S. 256 ff.
- (19) So schon RGZ 71, 165 und 115, 415; nunmehr BGHSt. 1, 313 (=NJW 1951, 893).
- (20) Dazu REINCKE a. a. O. 1036, mit Beispielen: II. ZS in LM Nr. 1 zu §4 Allg. Hverd Bed. und IV. ZS BGHZ 3, 162 zu §13 GVG. 声に応つて「選択的な」資料の利用は既に REICHEL a. a. O. 69: 「我が国の裁判官の所謂資料のための容態はそのときもまたいろいろいかなり独立的なものであり、いかなるしほは恣意的であらう」。
- (21) REINCKEL ebda. 1035, Beispiel: I. ZS BGHZ 3, 316.
- (22) Beispiele bei Du Pasquier a. a. O. 20/21, und MEIER-HAYOZ (N. I 69).
- (23) So GrZS BGHZ 4, 153 (=NJW 1952, 337), ebenso II. ZS BGHZ 2, 176 (=NJW 1951, 602; Anm. in S.685) und IV. ZS LM Nr. 1 (zu §77 Ehe G).
- (24) それたより古い判例が更に従っている。同様であるのはやはり RG JW 1912, 69: 「明白な文言は解釈を一般に許容しない」。
- (25) 同様であるのは §6 ABGB. 殆んど字義通りに一致してゐる。すなわち Art. 3 I Einl. des alten C. c. ital. よりつてそう鋭いのは §22 Sachse. BGB. すなわち「法律はその文言に従つて、また、単語が疑問を許容するならば、他の仕方では知られた立法者の意図に従つて解釈せらるべきであらう」。
- (26) DE BOOR, Gesetzesauslegung und Technik im Urheberrecht のみならずその愛護の原則的叙述を参照せよ。 Festschrift für

- H. Niedermeyer (1953) 31 (36ff.). 教訓的であるのは BOEHMER (N. I 48) II, 2 172 ff. のもとにある BGGB の「訂正的」解説を通じて立法者の表象の教義学的改訂の事例もまたそうである。さらなる事例、すなわち、外見上第一の給付義務に歩み寄る「担保義務」としての BGB における売主の「権利の瑕疵責任」の誤解に導く取り扱いと判例を通してこの欠点の訂正。明らかな基準は他の容態規律の規範を引用することでもあり、この規律はその間基本的に変化してしまつた。例えば、オーストリア JN のための施行法第九条第二項が「国際法の一般規則」を引用するならば——、おそらく何人も今日、一八九二年の国際法規範を基礎とするほど、それほど「法律に忠実である」ことはないであらう。
- (172) RICHARD SCHMIDT (Das Reichsgericht und die deutsche Rechtswissenschaft: Die RG-Praxis im deutschen Rechtsleben II [1929] 293 ff.) の筆からの「法律、法律への忠実、法律の発展及び法律の改正のための姿勢における学問と実際の完全な一致の様式」に関する賞讃は、じつをいへば、たしかに記念論文集が捧げられた実際にのみ通用したのであった。記念論文集の保守的ならびに進歩的解説の本能的に見つづけた均衡——「態度をとるならば既に意識的な線を前提とするであらう」——は Sch. がそのせいでしているところであるが、「生存能力のある法思想」が試験され、また、それが歴史的な無駄な底荷から分離されるように、じつに残念ながら方法のための理論によつて完全に明らかになれるのではない。矛盾する格率の今なおつねに存立する混乱のために、最近の ZIMMERMANN, GA 1955, 336 を参照せよ。
- (173) RGZ 106, 272.
- (174) 裁判官による解説義務とその基準に関する基本的見方においてこのことは De Boor a. a. O. 34 によつて引用された一九五一年一〇月三〇日の BGHE (Bd. 3, 315) と完全に一致する。私が第四編 第一章、五 (N. IV 219) にあつて「Gesetzestreue und Prinzipienverwertung」という題目のためにみちびき言及している個所を参照せよ。
- (175) Methode de l'interprétation I, 257-316, insb. 269 ff.
- (176) Vgl. GERMAN (N. III 155) 16 ff; auch Du Pasquier a. a. O. II: 'Le T. F. は立法者をシナイ山の上に置くのではなく、また、書式の文言にへこみこみするのではなく。' 言ひまわしておつて二頁に引用された BGE をまた参照せよ。すなわち、「決定的であること、それは立法者が規定を公布した時代に彼が望んだことではなくして、法から法律の一般概念の光へひきたすことが存在するということである。」ドイツの声に関して、私が上記 (N. I, 3) に引用した BGH の長官 WEINKAUF の意見表明を参照せよ。原則的にはまた De Boor (N. III 171) 34-38, かつでもまた実証の尺度を参照することが全く欠けているのであり、この尺度は「適用事象」を操り、また、新しい解決の「有用性」を法技術的に管理するのである。HECK の世上言われている「考えてゆく従順さ」に関する巫子的予言の単語以来（それに対して正しい理由をもつてゐるのは CONG [N. I 67] 244 ff. [247/249]）もはや法律の原理ではない原理、しかも実証の尺度を生む原理へのこの内的結合の明暗濃淡は根本的に研討されてゐない。
- (177) Vgl. die Meinung von WEINKAUF a. a. O.
- (178) 例外は「実証主義は死した」実証主義萬歳」の結語をもつ Eb SCHMIDT (N. I 193) のこと RIEZLER (N. I 190) である。そのたゞに私の詳述 JZ 1953, 521/522.

- (17) 以下 BETTI (N. II 5) 173 ff. によって強調せらる。彼の “auto-integrazione” の表象に対する私の疑惑のために vgl. die Bemerkungen in JZ 1953, 523, Anm. 26.
- (18) このことについてはコモネローにおける「開かれた」論証との比較の際より容易にみられる。そこでもまた規範形成過程の分析がさらに生長したのであり、以下の第二〇章を参照せよ。このようにして我々の題目のために CARDOZO の次のことはあげられる。「私自身の概念は、彼（裁判官）が社会の承認された基準、時代の習慣に一致するようにする義務のもとにあるであらうというところである」（立法者としての裁判官 “The Nature of the Judicial Process” (1921) 98 ff. = Select Writings, S. 148 ff. 以下一連の第三講演）。また第四講演をも参照せよ。
- (19) 以下に The Subconscious Element in the Judicial Process, S. 142 ff. (= S. 168 ff.).
- (20) そのため Lex と Law との関係についての私の考察、以下の第十四章三〇三頁以下を参照し JZ 1953, 521 ff.
- (21) そのためは上述の第四章二二以下の第二一章六及び第二十四章六。
- (22) PETRUS ANDREA GAMMARUS, De extensionibus, in T. U. J. Bd. 18, c. 248 (vgl. N. IV, 105).